



## メキシコ合衆国

Estados Unidos Mexicanos



### 最近のメキシコ中央高原の自動車フィーバー

鈴木 康久

先日レオンの工科大学で講演する機会があった。メキシコの中央高原地帯全体で自動車産業が発展しているところから、講演の中身は、自動車の生産に使用する素材から、センサーがぎっしり詰まった自動車のIT化まで、自動車産業そのものが大きく変化を遂げつつあるというテーマにしたが、大講堂がぎっしり埋まる800名もの聴衆が集まった。しかも、その講演後学長が生徒の一人を壇上上げて他の学生に紹介した。彼はプエルト・インテリオール工業団地の、ある日系企業のインターンとして、その大阪本社に1年間研修を受けに行くという説明であった。その学生は聴衆の拍手喝采の中で「頑張ります」と手を振りながらスピーチした。同校の輝くホープ誕生である。ちなみに日本への片道の旅費はグアナファト州政

府が負担するそうで、グアナファト州政府も、グアナファトの産業を支える将来のある生徒への投資に力を入れている。

レオン市のあるグアナファト州にはGMの工場が90年代からあったが、今そこにマツダとホンダが進出し、その上トヨタも工場の建設を始めている。米国への出稼ぎの多い州の筆頭だったグアナファト州には、現在大小併せて42もの工業団地があり、さらにいくつかの工業団地を新たに建設中である。日本にちなんで「センダイ」という工業団地まである。最大の工業団地はプエルト・インテリオール工業団地で、100社あまりの企業が団地内にありVW、ピレリといった欧米企業に加えて、50社を超える日系企業が工場を構えている。現在その団地は拡充のために工事中で、大学、ホテル、病院、

銀行、レストラン、それに保育所などが整備される予定である。現在その工業団地の社長はルイス・キロス氏といい、元レオン市長も務めた人物である。彼は団地内の施設整備に力を入れており、自分がこの事実上の市長であると公言している。自動車とその裾野産業のおかげで何万人もの新規雇用が生まれ、かつ、工場で働く工員は、研修を受けるだけでなく、能力が認められれば日本での研修の道も開かれている。そういうわけで、いまグアナファトを中心とする中央高原地帯では、日系企業に就職しようとする人たちの熱い視線が注がれている。そのおかげで、周辺の工業高校や大学から小生への講演依頼もひっきりなしの状態である。講演後には「日本企業で働くためにはどういう資質が必要か」とか、「何を勉強すれば良いか」といった具体的な質問が、真剣なまなざしの生徒から出される。

こうしたフィーバーの中でメキシコ人との間で摩擦がないわけではない。たとえば賃金体系や職場環境についての日本とメキシコとの文化の違いがある。メキシコの賃金体系は米国に似ており、日本のような終身雇用、年功序列型の給与体系ではないため、ハイクラスの大卒は、工場マネージャーを目指して就職し、工員の何十倍もの高い給与を要求する。それも就業数年で要求する場合が少なくない。現実には日系企業ではそう



レオン工科大学での講演会

した要求に対応できる企業ばかりではなく、結果としてマネージャー候補が他の外資系企業に流れることも少なくない。また工場地帯として発展してきてまだ間もないため、工場で継続して働くということになれていない工員も少なく、給与を受け取って退職し、また気が向いたら別の会社の求職の列に並ぶということも少なくない。二つ目の課題は職場環境である。日本社会は、良い意味で個人のプライバシーを大切にする。言い換えれば個人主義的なところがあるが、メキシコ人社会は、家族や友人との触れあいを大事にする社会で、普段我々が感じる以上にウェットな人が多い。そのため、人事専門のメキシコ人コンサルタントによれば、工員に声をかけ、可能であれば「彼女とうまくいっているか」、「奥さんは元気か」というような、アットホームな人間関係の醸成が必要であるとか、品質管理の成績優秀者に対する表彰式に家族を呼ぶ = 感激する母親や彼女の前で工員を表彰すれば、その工員の忠誠度は倍増する? = とか、こどもの日を作って家族に工場を見学させたり、家族の日を作って工場の空き地にテントを張って家族との朝食会を催すとかの

ファミリー・イベントが重要だそうである。そんなわけで、日系企業の敷地内に、7人サッカーのコートを設けているところも少なくない。とはいうものの、こういった文化の違いによる摩擦は、お互いの交流が増えるに従って、次第に相互理解が深まり、メキシコ人も日系企業は長く勤めているとメリットが大きいことを理解し、日本人も、人間同士のふれあいを大切にする = 物理的に男同士でも抱擁し、肩を抱き合ったりするが!! = そうした家族的な雰囲気が好きになるものに思えてくる日もあるかと思う。

ロジスティックの面でいえば、メキシコの中央高原にできたアグアスカリエンテス州(日産の工場、日産とタイムラーベントの合弁会社 COMPAS (建設中))、グアナファト州(GM、マツダ、ホンダ、日野トラック、トヨタの工場(建設中))、ケレタロ州(ローカルサプライヤーも含め自動車パーツ工場や関連の営業所が400社)、サン・ルイス・ポトシ州(BMW、GMの工場(いずれも建設中))の工場群(ハリスコ州、サカテカス州を含む上記6州における日系企業の総数は500社あまりにも及んでい

る)は、広大な敷地を利用した工場であり、まさしく中央高原の真ん中にあり、海岸都市の工場地帯ではないので、輸出に当たっては、それをどうやって国外に運ぶかが大きな課題となっている。いずれの自動車メーカーのアセンブリー工場も、フェロメックス、カンサスといった北米に通じる鉄道線路沿いに建設されているものの、年間3百万台(1日1万台)もの車を輸出するには、それだけで足りず、車両運搬車や、大西洋岸にあるベラクルス港を使った車両用船舶輸送を利用することになる。但し、もともとベラクルス港は、商港としてだけではなく、観光港湾都市としても発展してきた経緯もあり、市内にはホテルが乱立し、大量の車両を留め置くだけの港湾施設や、車両運搬船を頻繁に横付けさせるだけの港湾施設を欠いている。従って港湾開発が期待されるころではあるが、ラテンアメリカの最近の傾向として、メキシコもそうした大型インフラには、政府が参画するのではなく、民間資本による開発を期待しているのではないかと考えられる。

そんなわけで、発展する自動車産業にも幾つか課題がないわけで



サラマンカ市での企業主催の駅伝の風景(メキシコ・マツダ提供)



日系企業主催の駅伝大会参加者たち

はないが、にもかかわらずこの地方を巻き込む投資フィーバーは、そういった課題をいずれは解決してくれるであろうといった楽観的な観測さえ可能にする。歴史的には、グアナファト州、ハリスコ州、アグアスカリエンテス州などの中央高原の諸州は、銀の産地で、それを守るための屈強な軍人がスペインから派遣され、同時にイエズス会やフランシスコ会の保守的なカトリックの神父も多く派遣されて、彼らの影響が強く、メキシコ革命の際にもカージェス大統領が出した宗教活動を制限する所謂カージェス法に反対して立ち上がり、政府と武力闘争 = クリステロ

スの乱 (1926 ~ 29 年) = を起こした人たちの州で、そのおかげで今でもグアナファト市、サンミゲル市、あるいはサン・ルイス・ポトシ市といった都市には立派な教会が建ち並び、しかも略奪から逃れた教会の銀器が整然と祭壇におかれている。そういった風土のせいか、この地方の人々は極めて真面目で、仕事に対しても勤勉な人たちである。

日系企業の経営者たちも中央高原 (バヒオ地区) のメキシコ人の人柄の良さや勤勉さを賞賛している。人的な意味でも、この地は企業家にとっての適地であるといえよう。こうして日系企業の投資が

メキシコの中央高原に集中する事態が起きているが、その結果、日本がメキシコの産業化に大きく貢献していると考えられる。あと 10 年、15 年すれば、多くのメキシコ人エンジニアが、自動車産業を支えていくような状況が生まれてこよう。その上で、多くの日系企業のビジネスが成功裏に進めば、日本とメキシコ関係を深化させるとつもない新しい時代の流れを作り出すであろう。

(以上は小生の個人的見解です。)

(すずき やすひさ  
在レオン (メキシコ) 総領事)

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『キューバ音楽を歩く旅』

さかぐち とおる 彩流社  
2016 年 12 月 213 頁 2,000 円+税 ISBN978-4-7791-2266-8

1997 年以來キューバ音楽に魅せられて通い詰めている著者の『キューバ音楽紀行』(東京書籍 2000 年) に続く、キューバの各種音楽とそれにもなう舞踊、楽器などをジャンル別にわかりやすい解説書。

2000 年に日本でも上映されてキューバ音楽への注目度を世界的に高めた映画『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』の年配ミュージシャンの楽団が主に演奏していたのは伝統音楽の「ソン」であるが、このほか「ダンソン」もあり、その他アフリカ伝来の宗教音楽・舞踏やスペイン直系の農民音楽プントなど様々なジャンルがある。著者は精力的にそれらの楽器、演奏されている場所を求めて各地を訪れ、音楽家たちとも交流している。後半の 65 ページはキューバに特に音楽を聴きに渡航したいという人のための旅行事情のガイドになっており、最終章「今後キューバはどう変わるか」では、2015 年の米国との国交回復による外国人観光客の急増、砂糖・ラム酒・タバコ・ニッケルに代わる外貨獲得源としての医師等人材派遣、海外在住者からの送金とならば観光産業の重視、マリエル港の経済特区開発の進展、物資不足から修理屋が幅をきかせていた時代から消費社会へ移行しつつありゴミの量が増えてきたこと、生活難は米国の経済封鎖のせいとしてきた政府の主張が通用しなくなったフィデル・カストロ後のキューバの展望についても言及している。

(桜井 敏浩)